

令和7年度 沖縄群島 病害虫発生予報 第3号 (6月予報)

○向こう1か月の天候の見通し (令和7年5月29日発表：沖縄気象台)

平均気温	降水量	日照時間
高い	ほぼ平年並	ほぼ平年並

○6月の発生予報 (沖縄群島)

作物	病害虫名	調査結果	予報		予報の根拠
		5月の発生量 (平年比)	5月からの 増減	6月の発生量 (平年比)	
さとうきび	① メイチュウ類 (カンシャシクイハマキ・イネヨトウ) (株出し)	並	↘	並	平年の発生量の推移 (↘)
	② バッタ類	並	↗	並	平年の発生量の推移 (↗)
(温州みかん)	① そうか病	並	↗	並	平年の発生量の推移 (↗)
	② ハダニ類	並	↗	並	平年の発生量の推移 (↗)
マンゴー	① ハダニ類	並	→	並	平年の発生量の推移 (→)

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※ (発生なし) は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量 (現況) と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予察の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫 (沖縄群島)

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
さとうきび	カンシャコバネナガカメムシ(ガイダー)	南大東島で発生が多くなっている (防除員報告)。本種は4月頃から10月頃までに3世代を繰り返す。畝間耕うん (中耕) を行うとともに、葉鞘部に幼虫の集団が見られる場合は薬剤を散布する。また、休耕地や収穫後の管理されていないほ場は発生源となるため、早急に耕起・砕土する。
	黒穂病	沖縄本島南部の一部ほ場、南大東島、久米島で発生が確認されている。胞子の飛散を防ぐために発病株は早めに抜き取り、袋に入れてほ場から持ち出して処分する。新植への感染を防ぐために発病ほ場やその隣接地からの採苗は控える。発病の多いほ場では株出し栽培をせず更新する。

(温州みかん)	カイガラムシ類	<p>一部のほ場でカイガラムシ類の発生が見られた。果実に発生すると、排泄された甘露にすす病が発生したり、定着した部分が着色不良、肥大阻害を引き起こし外観が損なわれ商品価値を低下させる。</p> <p>低密度に抑えるため、早期発見・防除に努める。</p>
(タカンカシ)	カイガラムシ類	<p>一部のほ場でカイガラムシ類の発生が見られた。果実に発生すると、排泄された甘露にすす病が発生したり、定着した部分が着色不良、肥大阻害を引き起こすことで、外観が損なわれるため商品価値を低下させる。低密度に抑えるため、早期発見・防除に努める。</p>
マンゴー	炭疽病・軸腐病・すす点病	<p>せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。</p>
	カイガラムシ類	<p>一部施設でコナカイガラムシ類の発生がみられた。</p> <p>多発すると防除が困難になるため、早期発見・防除に努める。カイガラムシ類は、一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。またハブラシ等で成幼虫をこすり落とすことも、密度低減に有効である。</p>

令和7年度 宮古群島 病害虫発生予報 第3号（6月予報）

○向こう1か月の天候の見通し（令和7年5月29日発表：沖縄気象台）

平均気温	降水量	日照時間
高い	ほぼ平年並	ほぼ平年並

○6月の発生予報（宮古群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			5月の発生量 (平年比)	5月からの 増減	6月の発生量 (平年比)	
さとうきび	①	メイチュウ類（カンシャシクイハマキ・イネヨトウ）（株出し）	並	↓	並	平年の発生量の推移（↓）
マンゴー	①	ハダニ類	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
オクラ	①	うどんこ病	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
	②	フタテンミドリヒメヨコバイ	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
	③	チョウ目幼虫	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予察の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫（宮古群島）

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
さとうきび	タイワンツチイナゴ	年1回の発生で3～5月に産卵し、4～6月にふ化する。1～3齢の若齢幼虫はほ場周辺の雑草を摂食し、4齢以降からサトウキビの葉を食害する。移動能力の低い若齢幼虫期の薬剤散布防除を徹底する。又、ほ場周辺の雑草防除を徹底する事も若齢幼虫防除に効果的である。
	カンシャコバネナガカメムシ（ガイダー）	複数の株出しほ場で発生が確認された。本種は4月頃から10月頃までに3世代を繰り返す。畝間耕うん（中耕）を行うとともに、葉鞘部に幼虫の集団が見られる場合は薬剤を散布する。また、休耕地や収穫後の管理されていないほ場は発生源となるため、早急に耕起・砕土する。
	黒穂病	複数のほ場で発生が確認されたが発病程度は平年並みであった。胞子の飛散を防ぐために発病株は早めに抜き取り、袋に入れてほ場から持ち出して処分する。新植への感染を防ぐため、発病ほ場やその隣接地からの採苗は控える。多発ほ場では株出し栽培をせず更新する。

マ ン ゴ ー	炭疽病・軸腐病・すす点病	せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。
	マンゴーハフクレタマバエ	一部施設でマンゴーハフクレタマバエの被害が見られた。 本種は繁殖スピードが早く、また幼虫の脱出痕から炭疽病等に感染しやすくなることから、被害葉及び不要な新梢を除去し、施設外に持ち出し処分する。
	カイガラムシ類	一部施設でコナカイガラムシ類、カタカイガラムシ類の発生がみられた。 多発すると防除が困難になるため、早期発見・防除に努める。 カイガラムシ類は、一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。
オ ク ラ	カタツムリ類	樹上に移動し、葉を食害する。樹上に移動すると防除が困難になるため、定植前や作物にかからないようにほ場周辺に登録農薬を処理し、密度を低減する。樹上に移動した場合は捕殺に努める。

令和7年度 八重山群島 病害虫発生予報 第3号（6月予報）

○向こう1か月の天候の見通し（令和7年5月29日発表：沖縄気象台）

平均気温	降水量	日照時間
高い	ほぼ平年並	ほぼ平年並

○6月の発生予報（八重山群島）

作物	病害虫名	調査結果	予報		予報の根拠
		5月の発生量 （平年比）	5月からの 増減	6月の発生量 （平年比）	
さとうきび	① メイチュウ類（カンシャシクイハマキ・イネヨトウ）（株出し）	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘）
	マンゴー	① チャノキイロアザミウマ	並	→	並
	② ハダニ類	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
オクラ	① うどんこ病	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘）
	② アブラムシ類	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
	③ フタテンミドリヒメヨコバイ	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
	④ チョウ目幼虫	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予察の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫（八重山群島）

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
さとうきび	黒穂病	波照間島の一部ほ場で黒穂病の発生が見られた（防除員報告）。胞子の飛散を防ぐために発病株は早めに抜き取り、袋に入れてほ場から持ち出して処分する。新植への感染を防ぐため、発病ほ場やその隣接地からの採苗は控える。多発ほ場では株出し栽培をせず更新する。
	カンシャコバネナガカメムシ（ガイダー）	複数の株出しほ場で発生が確認された。本種は4月頃から10月頃までに3世代を繰り返す。畝間耕うん（中耕）を行うとともに、葉鞘部に幼虫の集団が見られる場合は薬剤を散布する。また、休耕地や収穫後の管理されていないほ場は発生源となるため、早急に耕起・砕土する。

マ ン ゴ ー	炭疽病・軸腐病・すす点病	せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。
	マンゴーハフクレタマバエ	複数の施設で新梢にマンゴーハフクレタマバエの被害が見られた。本種は繁殖スピードが速く、また幼虫の脱出痕から炭疽病等に感染しやすくなることから、被害葉及び不要な新梢を除去し、施設外に持ち出し処分する。
	カイガラムシ類	一部施設でコナカイガラムシ類、カタカイガラムシ類の発生が見られた。多発すると防除が困難になるため、早期発見・防除に努める。カイガラムシ類は、一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。またハブラシ等で成幼虫をこすり落とすことも、密度低減に有効である。